

Title	アンリ・ベルクソンの空間論に関する哲学史研究：ラッセルを中心とした同時代人の受容と批判に着目して
Author(s)	磯島, 浩貴
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96196">https://hdl.handle.net/11094/96196</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 磯 島 浩 貴 )

論文題名

アンリ・ベルクソンの空間論に関する哲学史研究：ラッセルを中心とした同時代人の受容と批判に着目して

## 論文内容の要旨

本論文は、アンリ・ベルクソンの哲学の中でも、「空間論」に焦点を当てた研究である。本論の特徴は、ベルクソンの空間論を、その置かれていた状況の中で読み解こうと試みた点にある。本論文は、「はじめに」と「結論」を除く2部、5章から構成されている。

「はじめに」では、本論がいかなる哲学史研究であるのかを確認した。「哲学にとって堅固な土台はあるか」という問いに対し、その堅固な土台とはその時代に生きる人々に残された「痕跡」だと規定した。この痕跡を本論では、その時代に生きている人であれば必ず影響を受ける<時代の痕跡>と、哲学用語を作る哲学者自身の拘りが残る<或る哲学者が残した痕跡>の二つに区別した。本論の目的は、この二つの<痕跡>の検討を通じて「アンリ・ベルクソンの空間論」の内実を取り扱う点に存することを示した。

本論1部では、「ベルクソン」及び「ベルクソンの空間論」に関わる「時代精神」の背景を見た。

1章では、本論の先行研究にあたるVrahimisの解釈を通じて、ベルクソン哲学の英語圏における受容を確認した。要点は、Čapekによる否定的な読解を乗り越え、英語圏におけるベルクソン受容において大きな役割を果たしたのはジェイムズのベルクソン紹介であり、それがラッセルをはじめとした英語圏の多くのベルクソンの読者に影響を与えたことを指摘した(1.1)。次に英語圏におけるベルクソン哲学の受容者(W. B. ピトキン、B. ラッセル、W. ジェイムズ)が提示する『創造的進化』理解を検討し、当時の英語圏のベルクソンの読者が「知性論」と「空間論」に着目していたことを示し、この二つの論点から「知性の排除」という論点に留まるVrahimisの解釈を前進させた(1.2)。

2章では、ベルクソンの空間論の前史にあたる19世紀数学思想における「新しい空間論」の成立過程を、平行線公理に関する疑義とカント主義からの脱却という論点から確認し、ベルクソンの時代における「空間論」の研究状況を分類し位置づけた(2.1)。次にベルクソン自身の空間論とギリシア観(ギリシアの精確さ)との関係を『時間観念の歴史講義』から検討した。ベルクソンのギリシア数学理解を、エレア派の形而上学の影響を加味して論証数学の形成過程を記述した伊東の成果を利用し、ベルクソンの「ギリシアの精確さ」概念の内実をギリシア数学史から検討した(2.2)。

3章では、「形而上学入門」で提示される分析と直観という認識に関する概念の役割と、同時代的な位置づけを当時の直観概念に関する大局的な見地から明らかにすることを目標とした。ベルクソンにおける「直観」概念の基本的な主張を確認し、これまであまり注目されてこなかった<やり直しの論理>とでも呼ぶべき論点で、ベルクソンが<実在認識における既存の位置づけを直観的認識によって徹底的に更新する意図を持っていた>ことを指摘した(3.1)。次にポアンカレの『科学の価値』所収の「数学における直観と論理」という論文を検討し、ベルクソンの時代における「直観」概念が多義的な働きを持つことを確認し、そこからベルクソンの直観概念の再評価を行った(3.2)。

本論2部はベルクソンの「空間論」について、『試論』以来の基本的な主張と、『創造的進化』に関するE. ボレルの批判とそれに対するベルクソンの応答を中心に論じた。ベルクソンと同時代人の比較の中でベルクソンの空間論を評価することを目的とした。

4章では、『試論』の空間論を確認し(4.1)、次に『試論』の空間論に対するルジャラスの批判を確認し(4.2)、最後に『物質と記憶』につながるベルクソンの移行期の議論をアンリIV世校の『講義録』を通じて確認した(4.3)。

5章では、『創造的進化』における哲学と数学の関係、そして学知の進歩を巡るボレルとベルクソンの間で生じた批判と応答の内実を明らかにした。ボレルのベルクソン批判の背景を確認し(5.1)、次に知性の前進的進化を主張するボレルの『創造的進化』の書評論文の内容を確認した(5.2)。そこから、知性の進化は先進ではなく「反転」というベルクソンの応答を確認し(5.3)、なおも自説を曲げずに遂行されるボレルの再批判を確認し、最後にボレルの批判に最終的に応答しなかったベルクソンの代わりに本論の読解の限りでボレルに再応答を行った(5.4)。以上を踏まえて、「人間種は幾何学者として生まれる」というベルクソンのテーゼの確認及び、今後の課題として本論の立場から『創造的進化』の空間論をいかなる仕方で展開すべきかを示した(5.5)。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (磯 島 浩 貴)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	准教授	近藤 和敬
	副 査	教授	村上 靖彦
	副 査	教授	藤川 信夫
	副 査	学外委員	三宅 岳史 (香川大学教育学部学校教員養成課程/創発科学研究科創発科学専攻 教授)

## 論文審査の結果の要旨

磯島浩貴の論考「アンリ・ベルクソンの空間論に関する哲学史研究：ラッセルを中心とした同時代人の受容と批判に着目して」は、19世紀 - 20世紀前半のフランスの哲学者アンリ・ベルクソンの哲学を、とくに彼の「空間」の捉え方に着目して、ベルクソン哲学の哲学的な関係性を捉えなおすことをとおして明らかにしたものである。その際本論考は、哲学史の影響関係を、ベルクソンやその関係する哲学者にたいする「時代の痕跡」としての「痕跡」と、それぞれの哲学者が同時代の哲学者たちの議論に「残した痕跡」という二つの異なる方向性の「痕跡」を分析することをとおして、研究を進めている点に特徴を有する。

本論は「はじめに」と「結論」を別とした二部構成からなり、第一部では、ベルクソンの空間論の背後にある当時の空間論にかんする時代精神を精査し、第二部では、第一部の成果を踏まえて、ベルクソンの空間論を再構成するためにベルクソンの同時代の数学者あるルイ・ルシャラスやエミール・ボレルによるベルクソンの空間論にたいする批判と、それにたいするベルクソンの応答を分析する。

第一部は、全三章からなる。

第一章「「ベルクソンの哲学」の英語圏の受容」では、ベルクソンの同時代で、ベルクソンの英語圏への紹介に深くかかわったウィリアム・ジェームズによるベルクソンの理解と、それに基づくしかたで、ベルクソンの知性/直観の概念を批判したことで、英語圏、とくに分析哲学におけるベルクソン受容に方向性を与えたパートランド・ラッセルのベルクソン批判を、先行研究であるA. Vrahimisの研究を導きとしながら詳細に検討している。

第二章「ベルクソンの空間論前史：「新しい空間論」、「公理的論証」では、近藤洋逸、伊東俊太郎らの数学史研究を導きとしながら、平行線公理の歴史を振り返りながら、非ユークリッド幾何学が19世紀にかけてどのように受容され、それが哲学上の問題とどのように関係づけられて理解されたのかということ、また公理的論証という推論のスタイルが、人間知性の範型としてどのように受容されたのかということを経史的に明らかにしたうえで、それらとベルクソンの哲学との関係について明らかにしている。

第三章「「直観」の多義性を巡って」では、ベルクソンの「直観」概念について、とりわけそれを哲学の方法として明示的に導入する論文として知られるベルクソンの「形而上学入門」を詳細に検討する一方で、ベルクソンの同時代の言説空間において用いられている「直観」概念の例として、同時代の著名な数学者で、ラッセルらの論理主義の批判者としても知られるアンリ・ポアンカレによる「直観」概念の理解を取り上げ、それとの関係性を分析している。

第二部は全二章からなる。

第四章「空間概念の二つの見方：『試論』を中心に」では、ベルクソンの最初の著作である『意識に直接与えられたものについての試論』における「空間」概念のあり方について、前述の19世紀における幾何学の大きな変化を踏まえて分析すると同時に、『試論』の「空間」概念を批判する書評を書いたルイ・ルシャラスの議論を取り上げて、ベルクソンの議論が同時代の数学者によってどのように理解されるのかを批判的に再構成し、その議論の「痕跡」を、『試論』から『物質と記憶』に至るあいだにあたるアンリ四世校でのベルクソンの講義録に見出し、ベルクソンの「空間」概念の内実を掘り下げていく。

第五章「幾何学的知性は直観か：ボレルによるベルクソン批判」では、先述の数学者ボレルによるベルクソンの評価を「幾何学的知性の進化」という主題に焦点を当てて論じている。その際、ボレルによる批判、ベルクソンの

応答、ボレルによる再反論を歴史的経緯のなかで丁寧に明らかにすると同時に、当時のベルクソンの立場から考えられるありうるベルクソンによる再反論を提示することで、ベルクソンの「幾何学的知性」の考えを明らかにしている。

以上のように本論考は、初期ベルクソンの哲学を、とりわけこれまであまり注目されてこなかった「空間」概念との関係で読み解き、かつその「空間」概念のおかれている認識論的布置を、同時代の哲学者や数学者らとの詳細なやり取りを復元することをおして、丁寧にこなうものであり、哲学史研究を単なる哲学のインターナルな観念史研究にとどめることなく、同時代の社会のなかでの実際の影響関係において理解する方向性を示している点でも重要な研究であると言える。

以上、論文審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。